
Season

歌音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Season

【コード】

N6386W

【作者名】

歌音

【あらすじ】

ー新しい学校で新しい春が始まるー

春 1 (前書き)

前作「幸平と真琴の日常」も絡めます。
別に読まなくても理解はできますが…

今回はバンド系です。

イメージOP

街 / SOPHIA

「春。俺ー阪上芳樹>さかがみよしきくは高校生になった。と言っても半分くらいは地元の友達だったりするからあまり変わり様がない気もするのだが、やはり新しい所は胸が踊る。」

俺の通う学校：狭丘学校。4階建て3棟、温水プール完備、ライブスタジオ完備というなんとまあ公立高校の割にはやたらと設備の良い学校だ。

入学式なので、小学校からの友人 南部幸平>なんべこうへいくとこの学校の入学式に来た。短髪で容姿端麗、凄く優しい雰囲気俺の親友だ。

「やっぱり、新しい学校はいいねえ…」今縁側にいるおじいちゃんの様なほんわかした表情だ。これが女子の心を捉えるのか？と思う。「言っておくけど、芳樹もかつこいいからね？」

「おまえはユリゲラーか！」訳の分からないツッコミをしてしまった。

「高校で良い事有るといいねえ…」

「そうだな、やりたい事は有るけどいざ高校入ったらどうなるやら…まあ、楽しみだけだな」

「芳樹は羽目を外して問題を起こさないでね。やりかねないからさ。」

「俺今まで何もやってないよな？誤解招くからやめて下さい！ほら、周りからもう避けられているし！」

「あははー」「あははーじゃない！」

などと馬鹿をしながら学校に着いた。幸平と馬鹿していると楽しいし

偽りが無いから楽だ。

「さて、友達いないけど高校生活を楽しむかな！」と幸平。さっきの反撃だ…

「よし、もう幸平に話しかけないわ。じゃあな」

「ごめん！冗談だから、友達やめないで！」
何か勝った気がする。

「まあ、楽しもうぜ親友」

「そうだね、これからも宜しく」
そう言って拳を合わせた。

―自分の中で新しい四季が始まる、そんな気がした。

春 1 (後書き)

歌音「始めましたよ！新シリーズSeasonが！」

芳樹「収集つなくなってもしらねえぞ」

歌音「あ、大丈夫。バンドネタは僕やつてるから分かるし、結末も考えて有るから」

芳樹「…何か不安だ」

歌音「まあまあ、頑張るよ」

芳樹「期待しないで待つわ」

歌音「何だよ、その顔は…仕切り直して、新シリーズ始めました！恐らく休日更新になるので更新は遅めですが長い目で見て頂けると幸いです！」

芳樹「まあ、平日とか帰宅時間が8時だから無理だな」

歌音「そうそう…そういう事でこれからも宜しく願います！」

芳樹「宜しく願いますぜ！」

春 2 (前書き)

阪上芳樹の特徴：鋭い垂れ目、長髪、凛々しい顔つき、クールになりたいけど熱血になりかける性格。

細かい事は追いつ追いつ小説内で記して行きます。

因みにモデルは今年4月1日に解散宣言をしたビジュアルメタルバンドのボーカルです。

春 2

「やべえ！遅刻だ！」

春休みの癖が抜けず、携帯のアラームを8時にセットしていた。ただ、幸いにもスヌーズ機能を取ってなかったなので10分後にまた鳴り、慌てて自宅を飛び出して来た。学校の始業の時間は8:30だ。

(流石に早々遅刻する訳にはいかねえからな…！)

とりあえず、寝癖を直しパンを流し込んで制服を着ながら出て行く。

「行つてきます！」

兎も角走る。この間の入学式で歩いて20分だから上手くすればギリギリ着くはずだ。

ー現在時刻 8:17ー

(間に合うか…?)

前に歩いている人が居るなら車道を走る。信号は誰もいなければ無視。適度に整えた筈の髪も今は殆どオールバックになりかけている。人間として酷い事をしているが今回は目を瞑ってくれ…

ー現在時刻 8:24ー

学校までの最後の直線になった。最後の難関として傾斜の激しい橋が待っていた。

(こんじゃ…ろっ…！)

止まらず勢いで走り続ける。汗が目の付近に溜まり視界の邪魔になったため荒っぽく腕で拭う。

橋を超えたためもう俺に障害は無い筈だ。

ー現在時刻 8:27ー

靴を下駄箱に投げ入れ上履きを掴み取る。そこで俺が気がついたのは…

「確か俺のクラスって4階の端だっけ…」

もうそりやげんなり。因みに今は1階の下駄箱。またダッシュかよ…勘弁してくれ。

「もう腹を括るか…なっ！」

4階のクラスに向けて走り出す。階段は2段飛ばし。これなら間に合いそうだ。

3階と4階の踊り場に辿り着いた時に

「くおら！走るな、馬鹿たれ！」

上から少女の声が聞こえてきた。

ー肩までの茶色かった髪にウェーブみたいな髪。顔は眉毛は細めで目はぱっちり大きくて吊り目気味。唇は不機嫌そうに下がっている。一見美人そうだがだが、勝気な顔をしているので少し魅力が半減している気がするー

この間0.5秒。よく俺こんなに確認できるな…不思議だ。

しかし、時間が無いからどうにか通り抜きたい。だから思わず頭に浮かんだ言葉を言う事にする。

「おい！あんた赤い紐がスカートから見えてんぞ！」

勿論嘘だ。階段は見れない様に計算されてるみたいだから普通は見れない（凄いやな）。スカートを押さええている間に抜けるつもりだったんだが、

「なっー！」っと少女が声を発し、慌てて前と後ろを押さえていた。

（一体なんなんだ？）

と思うが時間が惜しいから無視する。そして教室に向けて加速する。

もう教室は目の前だ…！

そして、ドアに手を掛ける！

「ギリギリセーッ…フ？」

「ギリギリアウトだ、阪上…！」

ー 現在時刻 8:30:54 ー

初老の担任が飽きた様で苦笑を浮かべていた。

この後、出席簿の横部分で叩かれました。

ー イテエ…情けなえなあ…

春 2 (後書き)

芳樹「…ぜえ…ぜえ…どんだけ走らせんだ、クソ作者…」

歌音「はい、お疲れ様ー」

芳樹「おまえ、30分も走ってみろ！」

歌音「毎日水泳部で5000mを2時間ぐらいでおよいでるが？その後10kmのチャリだよ？」

芳樹「…すまん」

春 3

「やあ、間に合わなかったねえ……」

「走ったから間に合うと思ったんだけどな」

斜め後ろにいる幸平が話掛けてきた為、振り向く。

「何か災難だね。僕が起こしに行つてあげれば良かった？」

「男に起こされる趣味は持ち合わせてねえよ」

冗談が来た為、笑つて返す。

いつも俺たちはこんな感じだ。

「あはは。で、何で遅れたの？今日のテスト勉強？それともギターでもやってたのかな？」

「ああ……ちよつと音のレパトリーを増やしたくてエフェクターをちよつと……え？テスト？」

え、何それ。聞いてないぞ？

「うん、何か新入生テストするつて言つてたよ？」

「え、知らないんだが……」

「いや、しっかり帰りのホームルームで言つてたよ。主要三科目のテスト」

……マジすか。しっかり聞いとけば良かった。

ガララッ！

「をし、テストやるぞ〜」

最早、絶望の音にしか聞こえなかった。

〜テスト後の昼休み〜

「おーい？芳樹？生きてるか？」

「初回からやってしまった…」

最早、俺は白い灰であった。本当に燃え尽きた訳ではないがな。

「…分かるか、幸平？この漢文を現代訳しろなんて？」

「ああ、分からないよねー…あついう問題は嫌いなんだよねー。」

やはりできなかったようだ。何だか同じ感じがするから嬉しくなる。

「だよな！無理だよな！」

「うん、でもそれ以外は簡単に笑えたんだけどね〜」

「お前は敵だ！」

一瞬でも仲間だと思った俺が馬鹿だった。今から制裁を…

「2人で何話してるのかな？」

女の子ー磯部真琴が話しかけてきた。

「や、やあ真琴さん」「よう」

前者が幸平で後者が俺だ。俺たちは中学からの友人関係だ。

因みに幸平は真琴の事を好きだと前に俺に教えてくれた。親友としては報われて欲しいものだ。

「いや、ちよつとさっきのテストの話をしていてね…それでできなかった問題あったという話なんだけど」

「へえ…そう言えばわたし数学ダメだったなあ…」

「真琴さんは数学？僕は漢文だめだったよ」

「え？そうなの？じゃあさ…」

「えー、何〜？」

今、真琴が後ろから幸平を抱きしめてますよ。

俺の目の前でいちやつき（？）始めましたよ。真琴は真琴でむっちら笑顔だしさ。

「もう、お前ら付き合っちゃえよ。そう俺は思った。

「すげえな、あいつら…あれで付き合ってたねえんだろ？」

誰かに話しかけられた。後ろを見るとチャラチャラしたような奴がいた。確か…

「紗東？」

紗東翔一と自己紹介してたのを思い出す。

「何て、他人行儀な！翔一て呼んでよ！俺も芳樹って呼ぶからさ！」

「いや、でも…」

「ほらほら、遠慮しないの！呼んでみ、芳樹？」

「えと…翔一…」

「よし！宜しくな！」

「…ああ！」

とても楽しい奴だなと思った。

春 3 (後書き)

歌音「ベタだね…」

芳樹「ああ…だな。」

歌音「善処するね」

芳樹「期待しないで待つわ…」

それから翔一と話してて分かった事はベースを弾いてるの事。
どうせなら一緒にやるうって言われてやる事にした。
どうせなら知り合いの方が良いしな。

もう一つはそこまでのチャラ男では無い事。まだ1人しか付き合っ
た事がなくて、まだ付き合ってるそうだ。隣クラスに居るらしい。
因みに手をつなぐ事しかできないそうな。
本人曰く「恥ずかしいじゃん！」だそうだ。

意外過ぎる翔一の一面を知った。案外純情なんだな…

それから数日後。今日で何処の部活に所属するか決める。…それと
テスト返し…

「うっわ、最悪…」

流石に凹む。中学生時代は90点連発だったのだが。

「平均75か…」

高校入ったら下がるといっ話は本当だったようだ。

「って、それ凄いやからね!」「お前勉強してないんだろ?」

と幸平と翔一。

「俺、勉強したけど平均30だからな」

と翔一が見せびらかす。

「芳樹はなんやかんや言ってやるよねー。凄いよ……」

と幸平が笑いながら言う。まあ凄いのかな？と適当に流す。

「そう言えば部活どうするんだ？」

「僕は文化部のどれかかな…天文部とかでも入ろうかな」

「俺はお前と軽音楽だな」

翔一は約束だからそうだろうなと思ったけど、幸平は意外だった。だけど、ピンときた。

「磯部さんも入るのか？」

「う、うん。まあそうだけど、多少は天文学にも興味は有るからね」

「へえ……」

凄く翔一がニヤニヤしている。目の前で純愛劇をしている様なものだから楽しいのだろう。俺にとってはイライラの元にしかならない。一とはちよっぴりしか思っていない。ちよっぴりだ、ちよっぴり。

そして放課後。幸平と別れて翔一と軽音楽部の集まりがある教室に
来た。

「おっと、それなりに居るな。女の子も居るぜ！選り取り見取りじ

「やね？」

翔一のテンションが上がる不意に後ろから話しかけられた。

「へえ〜…翔一君、浮気ですか…？」

ビクツと翔一は体を硬直させて、ギギギツと擬音がしそうな感じに首を後ろに向ける。

「ひ…緋奈…」

「御機嫌よう、翔一君」

「いや、これはだな…」

「何でしょうか？翔一君？」

ニコニコ。だけれども俺には青筋が見えます。

「えと…ひ、緋奈さん？その迸る殺気は何でしょうか？」

「何でも無いですよ？ただ、私の将来の夫の不貞に軽くしばこうかと思ってるだけですよ？」

「将来の夫って！俺の将来確定ですか？」

「あら…私が翔一君に告白した時に申したではないですか。『一生私と共にする』と。それをお忘れになっただけ？」

「ちよつと！あれは本気だったのか？」

「私は嘘は言いませんわ。なのに、翔一君は私を裏切って…今夜は寝かせませんわ…うふふふ…」

「あ、あれは勘弁してくれ！明日起きられないから！」

『あれ』ってなんだ。と言いたいのが聞かないでおこう。この人が翔一の恋人なんだろう。翔一が押されてるのは面白いな。

「ちょっと、緋奈！痴話喧嘩は家でやりなさいよ！」「誰かが来た様だ。」

「どれだけ言ったら分かるのよ…これで何回目…っあ俺を見て美少女は固まった。」

「あんた…この間の階段の…！」

何だか波乱の予感だな。

春 4 (後書き)

歌音「どうなるんだろうね」…

翔「俺と芳樹の区別がつかなくなりそう」

歌音「…確かに」

春 5

「誰だ？あんた？」

正直、覚えがない。女の子が頭を打たれた様な感じになった。

「こら！少し前に階段で走るなど注意したでしょ？」

あー…何か居た様な居ない様な…

「あつ！赤紐パン女か！」

「…っ…あの時のパンツの色を叫ぶな！」

「え…あれ冗談だったんだけど…」

「……………」

女の子は真っ赤になってしまった。そりゃ、自滅した様なものだからそうだろうな。

「…こっの、変態！実は見たんでしょ？警察に訴えるわ！」

「何でだよ！階段は普通に見れないだろ！」

ぎゃあぎゃあぎゃああ…

3分くらい言い合った気がする…

「あー…喉痛い…」

と、俺が呟く。そりゃそうかな。向こうも同じのようだ。

「と、とりあえず、見てないのは分かったわ…」

何とか解決(?)した。ふと横を見ると翔一とさっきの緋奈さんがニヤニヤしていた。

「何ですか？知り合いだったのですか？」

「しかも、パンツって…良い「翔一君？」「ゴメンナサイ」

条件反射だった。

「…とりあえず自己紹介でもしようか？」と俺。

「そうだな」と翔一

「えと、俺は阪上芳樹。ギターをやってます。好きなジャンルは口ツクとかメタルです」

「俺は紗東翔一です。ベース担当のロック好きだな」

「銀央緋奈です。今までピアノを習って来たのでキーボードと言うものをやらせていただくことになりました」

「赤尾穂奈美よ。歌う事…ボーカルつてのをやります」

さっきのパンツ女は赤尾って言うんだな…忘れない様にしよう…できただけ。

「なあ、どうせなら親密に下の名前で呼ばねえか？何か余所余所しいしね」

「それは良いですね。どうですか？芳樹さん？穂奈美さん？」

「まあ、構いませんけど」

「私も特に問題は無いわね」

「じゃあ、そう言う事だから宜しくな！」

…とこれ以外にも談笑していた時…

「はい、ではこれからミーティングを始めるので各自自由に座ってください」

と入ってきた教師に言われたので俺たちは固まって近くに座った。

それから俺たちは軽音楽に入った人がそれぞれ自己紹介をして、その中でバンドを組む事になった。

俺は翔一以外にドラムとボーカルを迎え入れた。4人体制でやるつもりだ。ボーカルは龍。ドラムは信汰と名乗った。

それぞれライブはやった事はあると言っていた。これはスムーズに事が進みそうだな。

穂奈美さんと緋奈さんは向こうで女の子3人と談笑しているのを見ると向こうは向こうで決まったようだ。

「よし、じゃあ各自スタジオをレンタルするなりしてくれ！学校のスタジオはライブとり八専用だからな！じゃあ、解散！」

と教師が締めくくったため終わった。

春 6

それからは4人で話し合い、やるのはジャンルはロックでカバーをしつつオリジナルもやるうと言っ話になった。

何か龍が「アニソン！」とかずっと叫んでたけど、翔一が殴って黙らせていた。

それから龍は机に突っ伏したまま起きてこなかった。翔一と信汰はそのまま話し合いを続けていた。

…まあいいか。こう言う奴だろう。

スルーする事に決めた。

一週間後、俺たちは初めてこのメンバーでスタジオに入った。

準備中、龍が「クリクリクリ…」と某有名アーティストの謎の曲を歌い出したが、信汰がスティックを投げて一撃昏倒。

…すっげえ力。

最早、龍は空気扱いだ。

そして、龍が復活して…

一度通して見る事にした。

「やっぱり慣れてるからスムーズに進むよね」と翔一。

今、俺たちがやっているのはビートルock系の曲だ。初めてだし、やりやすい曲にしようと言う事でこの曲にした。

「龍はサビのファルセットが少し低いから練習。信汰は…安定してるから問題無いか。翔一は時々リズムが狂いそうになるから注意して」

と、俺が評価をする。因みに俺はソロだ。一度、耳に通して聞きながら練習でもしようかな、と思った。

でも、やっぱり個々に技術はあるから後は細かい調整だけになりそうだ。

スタジオ練習後、俺たちは近くのファーストフード店で軽食を取っていた。馬鹿騒ぎ(90%龍)していると…

「こら！店では静かに！」

と、トレイが龍の後頭部に当たった。龍の安否より当てた人に敬服を示したい。

誰かと視線を巡らせると

「あ、変態と翔一君。それと…うん。信汰君と…ごめん、分からないや」

赤紐…じゃなくて穂奈美さんだった。隣には緋奈さんも居る。

「御機嫌よう、皆さん」

「…今のつて赤紐…穂奈美さんが当てたか？」

「コ・ロ・ス・ワ・ヨ」

寿命が半分になりました…ウチの母親より怖え…

「いや、冗談だ。で、どうしたんだ？」と俺。

「いやね、たまたま買い物しててたまたま通りかかって、その突っ伏してるバカが騒いでたから注意しただけなの！たまたまなんだからね！」

うわぁ、これがツンデレってやつか？全然デレてねえけど。

因みに信汰は逃げてった。龍も居ないと言う事は…帰ったんだな。きつとそうだろう。

「で。翔一君達はなにをしていたんですか？」と緋奈さん

「ん〜…今朝言ったじゃん。スタジオ練習があつたからその打ち上げ」

「…あら、そんな事は一言も聞いてませんわよ？」

「ちよつと待て！そこまで言わなきゃダメなんかい！」

緋奈さんは独占欲強すぎじゃねえか？と思う会話（？）であつた。チラツと穂奈美さんを見ると、向こうも呆れた様子で見っていた。

「…置いて帰ろっか…？」

「そうだな…」

俺たちも退散する事にした。

俺たちはポツリポツリと話しながら帰っていた。なんとか気まずくならない程度の会話だ。

…話題ねえな

とずっと考えていた。すると

「ねえ、あんたのギター聞かせてよ」

「はあ？いきなりどうしたんだ？」

正直、ビビった。本当にいきなり言われたからだ。

「いいじゃん、あんたがどんな風に弾くのか見てみたいしさあ」

「といっても、弾けるような場所は無いぞ」

「ほら、その公園で。弾けるでしょ？」

「恥ずかしいんだけど…」

「ほら、こっちに来る！」

と引つ張られた。…手を無意識のままに握られていた。

…女の子の手ってこんなに柔らかいんだ。それにこんなにいい匂い…

まずいまずい。と思い、意識をギターに向ける。

「まあ、上手く弾けなくても勘弁な」

「別に良いわよ。で、どんなのを弾くの？」

「えとな、前オリジナルで作った四季をテーマにした曲なんだけどね」

「うん、弾いてみてよ！」

先ずはFマイナーのアルペジオ。

四季にはそれぞれにテーマがあつて、春は柔らかく暖かい感じ。夏は力強めに爽やかに。秋は寂しく少しずつ衰えて行く感じに。冬はゆっくりで次第に春の陽気につながる感じ。

と弾いた。集中しているため、目の前で惚けて見ている穂奈美さんに気づかなかつた。

「…まあ、こんなものだよ。あれ、穂奈美さん？」

「……」

「穂奈美さん？」

とりあえず、耳たぶを引っ張ってみる。

「きゃわあああ？」

耳が痛い。キーンつてなってます。キーンつて。

「で、どうだった？」

「…」

「…？」

「凄いな！思わず聞き入っちゃったよ！」

「そうか？ありがとな」

「…かっこいいと思つたし…」

「え？何か言つた？」

「…何でも無い！」

穂奈美さんは真つ赤になつて否定している。

…そんなに感動したんだろう。うんうん。

なんだかとても気分が良かった。

春 6 (後書き)

歌音「いや、龍の扱い酷いな…」
芳樹「確かに…」

春 7

時間は過ぎ、体育祭。最近運動してないから次の日は筋肉痛だな…とネガティブシンキングをしてしまう。

「ほら！元気だして！」

穂奈美に背中を叩かれた。

あれから気づいたんだが実は同じクラスだったようで知らなかったと言ったら思いつきり頭を叩かれた。

…おかげで身長がガチで2cmも縮んだんだぞ！高校生で身長を伸ばすのはなかなかキツイんだからな！

とは言わないし言えない。言ったところでまた縮むだけだ。

「…今、何か失礼な事を考えたでしょ？」

ふと、上目遣いで見られる。不意にやられたためにドキツとしたが平静を保つ。

「いや、気のせいだ」

「絶対考えてたわよね？」

「細かい事を気にすると禿げるぞ」

「禿げ…！女子が禿げるか！芳樹の方が禿げやすいだろ！」

ふとある日、ギターを前で弾いた時から穂奈美さ…穂奈美は呼び捨てになった。

…何故だかは分からないけどさ…
前に聞いたら逃げられたし、聞かないことにした。

「…って！男に禿げるとか言うな！それは禁句だ！」

「知らないよ！芳樹は将来禿げる！」

「命令かよ！嫌だよ！」

絶対に将来育毛剤に躍起になるお父様にはなりたく無いものだ。

「…あゝ、お前ら喧嘩は後でやってくれないか？」

ふと、声をかけられて何かとみたら教師だった。

周りでは翔一を始めニヤニヤしている。

…恥ずかしいけど、何でニヤニヤされるか分からない

穂奈美は震えている。本当最近は理解にくるしむなあ…

俺は午前中は400m走。午後は二人三脚に参加する。

今は

「なあ、穂奈美。お前は何に出るんだっけ？」

「うん？二人三脚と棒引きかな」

「成る程な」

因みに二人三脚のペアは後でくじで決めるらしい。
行き当たりばったりで大丈夫か？

と考えてしまう。

「ただいま」

幸平が50m走から帰ってきた。幸平は全体総合1位を取ってきた。

「お帰りなさい！かつこよかったよ！」

と真琴さんが幸平に飛びついた。正確には抱きついたの方が正しいだろうか。

「ちよっ…真琴さん？落ち着いて！」

「あ、ごめんなさい。うん、かつこよかった！」

「だから、また抱きつかないで！」

これは凄いとしか言い様がない。級友達は微笑んでいる。

この2人はどうなるやら。と思った。

午前中の400m走は2位というまあ普通の成績を取った。

午後の二人三脚。今はペア決めのくじだ。同じ番号の人同士という典型的な決め方だ。

「うわあ！野郎とかよ？」

「やった！宜しくね！」「うん！」

などとそれぞれの反応を示している。色々できて楽しそうだなと思

っている。

「何で芳樹となのよ…」

今は現実逃避したい。何故か穂奈美と同じ番号になってしまった。災難としか言い様がない。

「誰が災難だつて…?」

「聞こえてたのか?」

「もろ口に出てたわよ!」

それからは二人三脚の為に紐を足に結びつけて走ることになった。

「ちょっと、近づき過ぎ…!」

「そんな事を言われても無理!」

ふによん。と柔らかい部分が肋骨に触れてくすぐりたい。と言うより、男として色々まずい。

「ほら!後続が来たよ!」

「おい、待てよ!」

ふによんふによん。穂奈美の胸が当たる。い、意外と大きい…

タスキを受け取り、一二一二と走る。一度、穂奈美が転けそうになったため俺が抱き寄せて立ち直させる。何か「アツ…」と聞こえたが無視する。

そのまま走り去り前の人を抜き去る。どうにか1位を取った。

「やったよ！芳樹、やったね！」
「ああ！」

やっぱり嬉しい。なので、抱きついて来た穂奈美を受け止める。
直後、俺がやった事に気づいた為慌てて穂奈美を離す。
穂奈美も気づいたらしく赤くなり下がる。

「…ごめん。」とおれが謝る。

「…別に良いのに…」

「は？何か言った？」

「…何でもない！」

そっぽ向かれました。何が何やら…

因みに借り物競争のときに…

「磯部真琴さんの好きな人は隣に居る南部幸平君だー！」

…一つの物語が生まれてた。

春 7 (後書き)

歌音「はい、こちらは借り物競争と微妙にリンクしてます(笑)」

芳樹「こじ付けじゃね?」

歌音「…因みに次からは夏になります」

夏 1 (前書き)

季節は変わり夏になりました。
今回は二部に分けます。

スタジオ練習をしつつ、2ヶ月の月日が経った。それぞれ技術的に問題は無かったのでスムーズに事が運んでいる。そんなこんなで今日は期末テスト2週間前だ。

中間テストは体育祭のため毎年ないそうだ。とりあえずラッキーなんだが…

これ一回で赤点が決まるのだ。失敗したら夏休み前半は補修になる。ハイリスクハイリターンだ。

一応、俺はそれなりに成績が良く、授業も理解しているので皆に教える事になった。つまりは勉強会の開催。

メンバーは俺、穂奈美、幸平、真琴さんだ。

因みに翔一と緋奈さんペアに関しては前にお誘いの電話をかけたとき…

「もしもし？翔一か？」

「おい助けてくれ後ろにバットを緋奈様嫌鬼がいる翔一死んじやーガンツ…ブツツ…ツーツーツー」

どうやら、この間翔一と出かけたんだが、女の子に話しかけられてデレデレしてたから緋奈さんは浮気だと思ったんだろう。

…いや待てよ。緋奈さん居なかったよな…どこで知ったんだ？

…考えを放棄する。何か怖い事になりそうだ。とりあえず、うん。
翔一が人間の姿で帰って来る事を祈って黙祷。2秒以下の黙祷を捧げよう。

さて、勉強会。一応、俺が教師役だ。教える身になると理解が深まるし相手は理解する。
一石二鳥だ。

場所はどつするのか？つて穂奈美に聞いたら…

「勿論、あんたの家」

だそうです。俺の周りには男には決定権が無い様です。
…泣きたくなるから思い出すのはやめよう。

以上、現実逃避。今は数学を教えているんだが…

「ここは相加平均と相乗平均の関係から $y = f(x)$ を置き換えた
tの範囲を導くんだけど…」
「ちよつと待つて。日本語を話して」

穂奈美が異常な程に理解力が有りません。泣いても良いですか？

幸平と真琴さんペアはお互い考えあつて解いている。分からなかつたら相方に聞くやり方だ。

今の所は順調だ。

多分、残りの時間は全て穂奈美に費やすんだろうな…と皮肉に思っ

ただんだけど、何故か嬉しかった。
何でだ？

「今日はありがとね！」

「助かるよ。本当に毎日お世話になってもいいの？」

「うん、俺も勉強になるから構わないよ」

「そう。助かるよ、芳樹！また明日ね！」

「邪魔しました」

6時になったため幸平と真琴さんは帰って行った。勿論、手を繋いで。

この2人はいつまでこの状態なのかな…と思う。

「で？穂奈美は何故帰らない？」

後ろに穂奈美がいるんだが…理解ができません。

「ねえ、あんた親居ないの？」

「ん？ああ、親父が出張なんだけど母さんが勝手について行っちゃったから今は俺一人」

「いつ帰って来るの？」

「多分、今年中」

「ふうーん…」

と、穂奈美は思案顔になる。少しすると、ぱっと顔を輝かせる。俺には不吉な予感しかしません。

「あたしが夕飯作ってあげる！」

…誰か胃腸薬を持ってきてくれ。ストレスで胃が荒れそうだ。

夏 2

さて、どうしてこうなったか説明してくれ。

今は穂奈美が台所で俺のために夕飯を作ってくれるそうだ。

美味しい状況だろうけど、どうしてか嫌な予感しかしない。

「ねえ、何がいい?」

悪魔：もとい穂奈美が聞いて来る。

「とりあえず、しなない程度に」

「何よ、それ」

暫くして料理が運ばれてきた。主食、副菜のバランスはしっかりと取れている。

「ほら!できたわよ!」

「うう…頂きます…」

先ずは目の前の主食!

パクッ!

—これは…

「お前、料理できるんだな」

「何よ！できないと思ってたの?!」

「いや、最近の若者は料理できないって聞くし…」

「できない人ばかりじゃないわ!」

「そうだな…うん、美味しいよ」

顔が緩んでしまう。本当に美味しいんだ。

「うん…何か新婚気分だな」

途端にボン！と聞こえて穂波は慌て出す。

「誰があんと結婚するか!」

「いや、誰もして欲しいなんて言っていないけど…」

「うう…」

唸って反論をやめる。

「…でも、あなたなら別にいいかな…むしろ、お願いした…」

「何か言ったか?」

「…何でもない!」

キレられた。これ以上聞いたら命の危機なので聞かない。

「…何のよ、もう…」

それからはお礼に穂奈美を家に送り、本日の勉強会は終了した。

それから2週間は翔一と緋奈さん以外全員俺の家にやってきて、穂奈美は俺のために毎日夕飯を作ってくれた。

「なんやかんやでしょうがないなあ…と言いながらにこやかに作ってくれた。」

「今度何かおごってやらなきゃな。」

因みにテスト結果だが、穂奈美はどうか回避。幸平と真琴さんは問題なし。

翔一と緋奈さんは…

「どうしてだよ！」

「翔一君が毎日私を怒らせていたからですわ！」

「俺何もしてないだろ?! 緋奈が勝手に…!!」

夫婦喧嘩を繰り広げています。

翔一が赤点街道真っしぐら。

時間が経ち終業式。

長々した校長の有難すぎる話しが終わり、成績表が帰ってくる。

「やったわ! 芳樹、夏休みを楽しめるわよ!」

「良かったな!」

穂奈美は俺の手を握って来る。そうすると、穂奈美は真っ赤になっ
て離す。

「まあ、ありがとね…」

「うん…」

何か気まずい雰囲気だけど、少し心地いいのは気のせいだろうか。

「そ、そうだ、夏遊ぼうぜ?!」

「い、良いね。遊ぼうよ!」

どもったけど、どうにか夏は遊べそうだ。

…何で誘おうと思ったんだろうか。

「うわあああああ!?!」

翔一の悲鳴だ。どうやら、赤点のようだ。

…そういや、あいつ勉強する時間が沢山あったのに何で…

「そういえば、最近緋奈の肌がツヤツヤなのよねえ〜…どうしてだ
る…」

…考えない事にした。

夏真っ盛り。俺と穂奈美は約束を果たしに海に来た。

と言っても近くの海だから大した事はないんだが…まあ、楽しもうか。

「…で、何で俺がお前の荷物を持たにやあかんのだ？」

「男なら黙って女性に奉仕！」

何とまあ男性差別。最近、女性優勢になっている気がする。今は肩が痛い。女の荷物ってどうしてこんなに重いんだ？

「…辛いのか？」

「多少な…」

そう言つと穂奈美は俺の手ごと荷物を握った。

「ほら、私も持つからシャキツとする！」

素直じゃないなあ…としか言いようがない。

海水浴場に着くと俺は先に準備を始めた。着替えが少ない分男はこき使われる。泣きたいぜ…

準備を終えてが穂奈美来た。…うん、凄い。それ一言に冥利に尽きるぞ…

「どう？似合ってるかな…？」

白ビキニにはパレオをつけている。黙っていればどこかのお姫様のようだ。黙ってればな…

「ねえ、今凄い失礼な事を考えてなかった？」

「いんや、気のせいだ。…うん、似合いすぎて見惚れた」

「ちよっ…芳樹…！」

真っ赤になる俺達。周りから見れば初々しいカップルか？実際は違っぞ。

「ほ、ほら遊ばないと勿体無いよ！遊ぼう！」

「ああ、そうだな」

手を握られ不覚にもドキツとしたがこの気持ちはなんだろうなと思っただ。

「きゃははは！冷たい！えい！」

「うわ！おら！」

「きゃあ…きゃっ！」

何で海で水かけあいをするんだろうな。未だに理解できないぜ…でも、楽しいから良いか。穂奈美見るとなんか…こう。うん。言葉にできない。

言葉にできないのは穂奈美が転んだだけじゃない。

大変です、みなさん。水着が取れました。案外、大きい。

「…ん？わあああ！見ないでえ！」
「ぐっ…?!」

引っ叩かれた。痛い…つか、俺は不可抗力だ…!

「たくもっ…何で素直になれないんだろ…」

「ん？何か言ったか？つか、水着沖に流れかけてるぞ？」

「何でもない！…取って来るわ。待ってて」

そう言っつて穂奈美は腕で隠しながら行つた。一応、此処で待つかな。

「ふう…次は解けないよね…っ！」

「っつて、おい！」

穂奈美が溺れ出した。たぶん、足でも攀ったか。そう思い、俺は救出に向かう。

手を掴んで岸に向かう。

「おい、大丈夫か？」

「…うん。良かった、芳樹が居て」

ぎゅっと抱きついてくる。色々和不味が理性で抑える代わりに頭を撫でる。無償に守ってやりたい衝動に駆られたがなんだろうか…

「…うん。もう、大丈夫だから。ありがとね…」

「……」

可愛い…こいつこんな笑い方するんだな…

「ん、ほらまだ遊ぶよ！」

「あ、ああ。そうだな」

それからは危険が無い様に遊んだ。穂奈美が楽しんでくれてるんだ
つたら良かったな。

ただ、ナンパ対象だけは骨を折った。喧嘩なんかしたくなかったの
になあ…

「今日は楽しかったよ！誘ってくれてありがとう！」

「ああ、それなら良かった」

帰り道。楽しかった日も終わりだ。穂奈美は腕を組む事を望んだか
らそれに応じた。流石に感触には慣れたな。

「また誘ってね…？」

「ああ」

「ふふふ、ありがとう。…んっ」

「うわ…」

頬に柔らかい感触！初めてキスされたんだけど！

「ふふ…じゃあね！」

「あ、ああ。また今度な」

ちよっぴり嬉しかったのは気のせいだろう。

夏 3 (後書き)

歌音「はいはいーいー！幸平編と同時進行でSeasonもやっていますー！」

芳樹「収集つかなくなりそうだな…！」

夏 4 (前書き)

ここから二、三話ほどやっちゃった感がでますが、必要過程なのでご了承くださいませ(´▽`)

「やっぱ、ここはベースを前に出した方が良いと思うよ」
「いや、ここはギターとベースのハーモニーを…」

今日は8月上旬。俺達は今スタジオで練習をしている。今はバラード曲だ。

ボーカルがとても難しいんだが龍はふざける割には上手いので問題ないだろう。

「芳樹、翔一。もう良いか？良かったら始めるぞ？」

「ああ、じゃあ始めようか」

静かになった時に信汰ドラムカウントが響くー
この緊張感だよな…と意識の端で思った。

夕暮れ、俺は皆と別れ1人帰路に着いてた。

「あ、芳樹」

ああ、赤紐…いや穂奈美だ。もうこれは忘れるか…。
で、穂奈美は笑顔で寄って来たから思わず俺は可愛いと思ってしまった。色々おかしくなってるな…

「よう…どうしたんだ？」

「ん？本屋帰り。ファッション雑誌欲しかったけどうってなかったんだ…。幸平はスタジオ帰り？」

「うん。何か、文化祭出させてくれるらしいから練習」

「ほう…見に行くから頑張つて！…で真つ直ぐ帰るの？」

「ああ」

「じゃあ一緒に帰ろうか！」

「そうだな」

実は最近家が近所でお互い隣の丁目という事が判明した。世の中は知らない事ばかりだ。

「…ねえそう言えばさ、宿題どこまでやった？」

「…まだ何も」

正直、練習してたため何もやらなかった。

いや、現実から逃げてたと言った方が適切だろうか。

いつもなら早めに終わらせるのだが、高校入って楽しい事だらけだからかな。

「…ねえ、一緒に宿題やらない？」

「…はあ？」

世にも奇妙な事を聞いた。俺がこいつと宿題をやるだと？

でも、終わってないし勉強するなら誰かとやった方が楽しい。

「で、こちらの提案としては料理を作つてあげる！」

「む…む…」

これはなかなかの提案…。

こいつの料理美味しいし食べれるなら光荣だ。

「うん、よしそれを飲んでやろう。一緒に宿題を片付けろぞ」

「やった！」

何故か飛び上がって喜ぶ穂奈美。俺も何故か嬉しいがどうしてだろ
う？

と考えてると穂奈美はにまにましながら

「その代わりい〜…」

「その代わり？」

「私を芳樹の家に泊まらせて？」

………はあ？！とんでも発言しました。

「じゃあ、今日から泊まりに行くからね！じゃあ、また後でね！」

「ちよっ…！おい！」

…泣いてもいいか？

俺の話聞いてよ…

私は凄い事をやらかしたのではないかと思った。だって、付き合っ
てない片思いの男の子と同棲するんだよ？！

これ程嬉しいものはないから！

そして私は誰も居ない家に帰ると着替え類を取り出し始めた。
家に両親が居ない理由は帰省だ。

私も行っても良かったんだけど1人暮らし気分を味わいたかったから残ってみた。

寂しかったけど、今日という日が生まれたから問題ない。

(下着どうしよう…こないだの赤紐持って行こうかな…)

男と同棲「アレと考えるとしまつのは思春期特有なんだろうが芳樹はそんな事はできないだろう。

「やっぱり男の子だから夜は狼かなあ…で私は何時の間にか虜にさせられて既成事実を作らされて学生結婚しちゃうのかなでやっぱりどっちかの家に住んであなたとか呼び合ったりあ子供の名前どうしよう!」

何がなんだか分からなくなってきたけど嬉しい!

「…あつ、行かなきゃ!」

「…で俺の意見は無視なのか?」

「何よ、私じゃ不満なの?」

「いや、そうじゃないけどさ…」

穂奈美は軽く1週間は泊まる量の荷物を持ってきた。
本当に泊り込むらしい。

「じゃあ、いいじゃん!」

…はあ…色々耐えられるかな…

夏 4 (後書き)

歌音「次回、遂に芳樹の理性崩壊！」

芳樹「しないから！」

歌音「させたいけど、15禁じゃないから無理」

芳樹「まあ、しないならいいか……」

歌音「うん。えと、ご感想とかお待ちしてます。結構貰えるとモチベーション上がるので……図々しいお願いですが宜しくお願いします

m () m () m

居候直後、穂奈美は汚いし部屋を把握したいから掃除をしたいと言
って来て…

「何よ、この本は…？」

俺は只今絶賛正座中。何かクールになりたいけどならせてもらえな
いこの頃。

つか、途中から幸平と同じでツッコミキャラになってねえか？

「聞いているの?!」

「…はい」

現実逃避終了。

穂奈美は今所謂…お宝本を右手に持っている。

俺がベッドのしただとバレるから…と思って本棚に隠したものだ。
どういいうわけか見つかりました。

「女って怖え…」

「…すみません」

「すみません…じゃないわ!こんな如何わしい本…」

「……」

「…ふん。これは没収します」

と言われて持って行かれました。

…はあ…

あいつもこんな本を持ってたのね…男の子だし仕方ないかな…
どれどれ中身は…

あいつの好みはスレンダーで巨乳好きね…
もっと胸大きくならないかしら…

一悶着があったが後の掃除は順調だった。穂奈美は小言を言いながら
らもやってくれた。

ーマジ助かるぜ…

その後、ご飯を作ってもらい順番に風呂に入った。

穂奈美は俺が先に風呂に入れと言われたけどあれはなんだ？ たんだ？
勿論、レディーファーストだ。

寝室は穂奈美を母の寝室に押し込める形で解決した…？
まあ、問題無いだろう。

で、俺は今部屋でギターの練習だ。
今まで誰もいなかったから良かったが今日は穂奈美が居るから抑え
めだ。

「くおらー！ つつさい！」

「お前がな」

うん、ライブハウスの轟音と同じレベルの音だ。耳痛え…

「何よ、気になってきちゃったじゃ無い！夜中に何してるのかと思
ったわ！」

「夜中に一体何をやるってんだ？」

「…な、何でも無いわよ！この変態！」

真つ赤になって俯きました。うん、聞きたくありません。

「で、嫌いから来たんだけど？別に気になっては居ないけどね？」

「…ただの練習だ。睡眠妨害したならゴメンな」

「…べ、別に良いんだけどさ…」

そう言っただけで俺の前に座った。何だこれは？

「ほ、ほら、聞いてあげるから弾きなさいよ！」

穂奈美は眩しい笑顔で言った。ドキドキしてしまったよ…

うん、やっぱり私はいいつの事好きみたいだね。

ここに来て完全に分かったわ。

あいつの前に行くとドキドキが止まらないし…最悪…いや、最高か
しら？

さて、今私は寝静まった芳樹の部屋の前に居る。

さっきギターを弾いてた芳樹に聞き惚れちゃったのはここだけの秘
密だよ。

で、今彼の部屋に入りたんだけど…だ、大丈夫よね…？

ちよっと、初めての部屋は怖くて眠れないのよ…

「お邪魔しまーす…」

うん、寝てた。覗き込むと幸せそうに寝てた。

私はこんなにドキドキしてるのに…

私、女として見られてない？

…多分そうかな。うん、今日から捻くれるのやめよう。
頑張って素直になる！

でも、どうせなら一泡吹かせようと思って服を脱ぎ下着姿になる。
キャミソールと下はあの時の赤紐だ。

ーお母さんに見られたら怒られそうだけど…今日くらいはいいかな
…？

そうして芳樹の布団に潜り込み彼の胸板に頭をつける。

明日が楽しみだわ…と思って暗闇に意識を投じた。

ーやっばい、私幸せ！

夏 5 (後書き)

歌音「あらあら…穂奈美ちゃんたら…」

穂奈美「うっさい！」

歌音「うわ…！危ない…次は金曜日になると思いまーす！とりあえず、明日が楽しみ！碧の軌跡買っよー！」

穂奈美「何か変わってきてるから！」

どうにか宿題を終えたため俺達はまったりしていた。終わったら理性的な問題で帰っていただきたいんだが穂奈美は帰りたがらなかった。

とりあえず、暫く居て分かったのは俺は穂奈美に恋をしているのでは？という事だ。

？なのはまだ確定できないため。世の中不思議だ。

んで、今日に至る。

「はあ？今日帰ってくる？」

『うん、そうよ。じゃあ宜しく』

切られました。とりあえず早いうちにウチの居候をどうにかせねば…ソファで寛いで居候もとい穂奈美に話しかける。

「なあ、帰ってくれないか？」

「いきなり何を言い出すの?!」

「いやな、理由があつて…」

「嫌よ！私が帰ったら他の女を上げるつもりだわ！」

「何でそうなるんだ！つか、お前にはあまり関係ないだろ?!」

「関係有るわよ!…だって私はあんだが…」

「はあ〜い、ただいま〜芳樹〜…あらお邪魔だったかしら？」

母親登場…母さんいやお母様…お約束過ぎます…

「で？どうして芳樹と一緒に住んでいるのかしら？」

芳樹のお母さん…和恵さんは芳樹を外に一時間程外出させて私と話し合う形にした。

「私はね、まだ付き合っていない男女と一緒に住むなんてダメだと思
うんだ。…いや、付き合っても問題だけどさ…」

「…はい」

問題なのは分かる…確かに軽率だった…

「はあ…まあいいわ。居候はダメ。何か間違いがあつてからだと思
いからね。芳樹も耐えられるか分からないし」

「…はい…」

全く耳に入らず、芳樹ともう会うなどか言われそうで怖い。好きな
人と会えなくなるのは辛いのだ…

「毎朝起こしに来たり夕飯を作るまでなら家に居ても良いわよ。た
だし家にちゃんと帰ってお母さんを安心させなさい」

「…はい…えっ？」

正直、聞き流していたから分からなかった。いや、人の話を聞き流
すのはどうかと思うけどさ…

「だから、家にちゃんと帰るなら私の家に居ても良いわよって言っ
たの。芳樹の事好きなんでしょ？」

「はい」

これは真っ直ぐ言える事だ。でも、前の部分にはビックリした。てっきり私の息子にもう会わないでくれと言われるのかと思ったのだ。

「じゃあ、しっかりとアピールしなきゃ！いつか取られちゃうわよ？」

「……」

急に話についていけなくなった。えと、私は通い妻をやれと？

「ほら、鍵よ！入れない時があるとキツイでしょ？じゃあ、私はこれから旦那の所に行くから！ああ、荷物はちゃんと家に戻しと来なさいね。」

「じゃあ、後は宜しく！芳樹との発展を祈って居るわ！」

と、バタバタ去って行った。

「……えつと……？」

コンビニで立ち読みして時間を潰して1時間。あつた雑誌は全て読んでしまった。

…アダルティなのは勿論読んでない。

「…ふう、只今」

シーンとしていた。そりゃそうだろうな。帰させるよな。とりあえず、何故俺には怒らずにあんたは帰るのですか、お母様。

「芳樹！」

「…ぐはっ!」

思いつきり背中から来ました。声的に…

「穂奈美…帰ったんじゃ無いのか？」

「うん、帰ったけどさ…」

帰ったけどさ？悪い予感しかしない。つか、止まれ俺の鳥肌!

「今日から芳樹のお世話をする事になりました!宜しくお願いします!」

「……はぁ?!」

お母様…俺の心臓を縮めるような事を残して行くな…

…一回殴ろつか、あのお袋…

夏 6 (後書き)

歌音「急展開！」

芳樹「過ぎるわ！」

歌音「いや、もともとこの展開だったから！ある意味シナリオ通り

…」

芳樹「…ごめん、ついていけない…」

秋 1

「ほら、芳樹。起きろ！」

「ぬわっ！」

穂奈美は俺の家に毎日通うようになり毎朝起こしにきて夕飯を作って9時になったら帰る生活を始めた。

でも、毎日一緒だし俺達は思春期ってヤツだから色んな事が起きる訳で…

「ほら、学校でしょ…いつ?!」

「…?」

穂奈美は俺の下半身を見て固まっている。見るとスタンダップ。わーお…

「いや！これは生理現象であって決してやましいものではない！」

「黙れ、この変態！」

ガツンと殴られました。痛え…

「くっく、ご飯で来たから下に来なさい！」

「…ああ…」

ズンズンと擬音が出て来そうなほどに歩いて行く。それが思わず可愛いと思ってしまった。

「ああ、俺はやっぱりあいつの事が好きなのかな…」

本日9月1日。始業の日だ。
俺は穂奈美と家を出て学校に向かう。

「ねえねえ？今日の夕飯何が良い？」

「うーん…たまにはロールキャベツ」

「あれは煮込むからダメ。明日ね。それ意外なら何がいい？」

「…天ぷらがいいなあ…」

「ん、じゃあ帰りにスーパー行こうか。食材無いだろうしさ！」

「ん、じゃあ俺は荷物持ちをしますよ、お嬢様」

「うむ、よろしい」

そして俺達はけたけた笑い合う。周りから変な目で見られたけど何だろうか？

穂奈美のファンとかいるのか？

「おはよー！」

と幸平が来た。隣には真琴さんも居る。

「あらあら、朝からラブラブね…」

「ちよっと、真琴！変な事を言わないで?!」

「うふふ…穂奈美嬉しそう…」

穂奈美は真っ赤になり俯く。あいつらと翔一達にはワケをを言っているのだ。言った時のあいつらのニヤニヤは理解したが…

「うん、女の子二人居ると華やぐねえ…」

「黙れ子種。好い加減子作りしてやれよ」

「いや！そっちに流すのはやめてくれない?!僕本気で困るんだけどー！」

「そうよう…幸平ったら私と一緒に風呂に入ってあげたのに何もしてくれなかったのよ…シクシク…」

「幸平くんサイテー」

「据え膳食わぬは男の恥だぞ」

「僕の味方は居ないの?!」

こんな会話をしていたから周りに笑われたがこんな日々が続くなら嬉しいかな…

始業式が終了したのでHRなんだが職員会議があるらしく暫く休み時間だ。なので俺は幸平と翔一で会話をしていた。

途中、男性の尊重権を手にしようとする真琴さん達に立ち向かおうとしたが無駄だと思いやめた。

「うん、そんな事言ったら殺される…いつから俺達がかかあ天下になっただ…」

いや、俺は違っけどさ…

「ねえ、芳樹くん?」

「何だ?」

話しかけて来たのはクラスの女子秋津さんだ。あまり関わりは無い。

「今日の放課後に教室にのこってて…?」

「あ、ああ」

何の事だか分からなかったから適当に返事した。放課後教室ね…了

「私は芳樹が好きなんだよ！好きな人をやすやすと手放したく無いわよ！帰るよ！芳樹！」

はあ？！ちよつと待てや。穂奈美が俺の事が好きだって？！いや、腕が切れる！

「あ、おい…ごめんや！俺はそれは受けられないから…」

閉まるドアの隙間に女の子の淋しそうな顔が見れた…

俺は穂奈美に手を引っ張られて近くの公園まで来てしまった。

「えと…穂奈美？さっきのは…？」

穂奈美は下を向いている…顔を見ようと体を傾けたら…

「そうよ、私はあんたが好きになってしまったの。だから、毎日芳樹の側にいられる様にしてるのよ…」

てっきり宿題のお返しだとばかり思っていた。

という訳では無いが、何か裏があるのだろうとは思っていた。

「えつと…俺は…」

「ストップ！」

そう言って俺の発言を止めた。遂に発言権すら無いのか？

「その答えは暫く後に聞くわよ、今すぐじゃなくても良いわ」
「ああ…」

答えは決まってる…多分言い出せないだろうけどさ。

「じゃあ、夕飯作ろう?」

「ああ」

そう言っつて穂奈美は手を握ってきたから俺は握り返した。

文化祭には絶対に言える様にするから…だから待っていてくれ…

「俺は穂奈美が好きだっつて」

秋 2

今日も穂奈美と登校。昨日、まさか告白されるといふ事態が発生したがその後は特に変わりが無かった。

…穂奈美がつんけんしなくなった以外は…

「ほら、早い時間なんだからゆっくり行こうよ！」

「ああ…」

俺ビツクリ。何か後ろを向いた途端にザツクリ…いや、無いか。

「ほら、ブーツとしない！」

「あつ…おい…」

手を引かれた。顔が暑くなるとともに穂奈美の顔も赤くなるのが見れた気がする…

「はい、今日は文化祭の出し物を決めるからな。後は頼んだ、委員長。俺は寝るから決まったら起こせ」

何ともまあ先生としての機能性を失ったような発言をされたが実はいつも通りだったりするから俺達は気にしない。

「で、今の所上がっているのは喫茶店、お化け屋敷、コスプレスリング、ボーリングだが他に何かある人〜？」

「何でも良いですよ〜」

あれ？翔一と緋奈さんって文化祭実行委員長だったのか？

「それ、一学期決めたわよ」

「…心読むな…」

いや、恐ろしい。

その後、多数決でお化け屋敷となった。それで今はコンセプトを決めるのだが…

「ハイハイ！俺、誰もが一生のトラウマになる様なお化け屋敷にしたいと思います！」

誰だ、おい！しかも学園祭でトラウマになるものって…。子供騙しのお化け屋敷に何ができるんだ…

「良いな、それ。よし、それ採用！他に意見は？！」

「…無い！」「…」

おいこら、翔一&エキストラ。色々おかしいだろ。

…そつだ、唯一の良心である緋奈さんは…

「…特殊メイクして…いや、衣装を…」

もうダメだこりゃ…ふと穂奈美を見ると

「大丈夫よ、私も付いて行けてないから」

「…良かった、味方が居て」

幸平の方を見てみるとあいつは寝てる…近くの真琴さんは…ノリノリだ…

俺の知り合いは変なの多くな？

それから時間は残酷にも過ぎ、文化祭前日の準備―

「おら、その人形持って来い！後、そのカーテンは…芳樹、邪魔！」

―見事にのけ者。だから俺は翔一を引つ張り練習に行く。

因みにお化け屋敷に決まった後に俺達はライブができる事になった。日時は文化祭2日目、後夜祭にて、だ。

今日は特別に学校のスタジオの開放。但し、時間制限ありでだ。

「時間がないからとつとつとやっちまおう。芳樹、翔一チューニング大丈夫か？」

「ああ…よし、セット終了。リハやるうぜ」

「よし、じゃあ行くよ。三、二、一…」

リハーサルが終わったから俺は…うん。相変わらずやる事は無し。

指示されたら動くという情けない事をしている。

放課後、またもや俺達は確認リハ。何故か文化祭1日目はできないそうだ。何故かは知らんがな。と言っても特に大きなミスは無いから良いのだが…

「なあ、皆。俺、やりたい事があるんだけど…」

「良いよ、言ってみな」

「あのな……」

翔一達にお願いしたら聞き受けてくれたため俺は後は実行するだけだな…
と思い先に帰ろうとすると

「や、芳樹。帰ろ？」

穂奈美が校門の所で待っていてくれた。正直嬉しい。

「お前、何時間待ってた？」

「今は8時だから…3時間ぐらいかな？」

「…帰っても良かったのに…」

「まあ、そこは片思いの相手ですから…」

にまにまと見てくるから俺は思わず目をそらしてしまう。
「俺も好きなんだけどな…」

「うわぁ！！」

いきなり校舎から悲鳴が聞こえた。凄く大きな声だったからビックリしてしまった。

「えと、帰ろうか…？」

「うん、か、帰ろう！」

そそくさと帰る。

因みにこれは幸平と真琴がやらかした事なんだが…この2人は知る余地も無かった。

秋 3

『これより、第64回文化祭を始めます』

わあっと学校中が弾けた。

この時は俺も高揚してしまった。

「芳樹、午前中暇？」

「えっとな…うん、暇だ。一緒に周るか？」

「うん、行こ行こ！」

「ああ…明日の後夜祭でバンド演奏するから来てくれよ？」

「うん、行くね！」

公立の文化祭と言えども舐めてはいけない。喫茶店やらアトラクシ
ョンやらクオリティが高いのだ。

「で、穂奈美？どこに行きたい？」

「うーん…じゃあ、ラブラブ度診断できる所」

「そんな所あるのか…？…いや、俺達付き合っていないから！」

「ほら、気にしない！私はちゃんと告白してるんだから！」

「…っっ…」

「あああら、初々しいカップルですね…憎たらしい…」

「今、凄い不吉な声が聞こえたんですけど」

「気のせいよ…爆発しろ…」

もう無視する事にした。

早く話をすると促すと…

「はい、ポッキー。これで長さが短いほどラブラブね…」

何か懐かしいかほりがする…

「…やるのか？」

「やるにきまつてるでしょ！」

「真っ赤になつて言われても何も説得力無いんだが…」

と言つてる間にゲーム進行。

…これからは脳内進行で行きます…ダメだ、現実が…

穂奈美は顔が真っ赤なまま目を閉じてるし何か食べるスピードが早い。これってあれだよな、キスをすると…いや、マズイだろ！

「ごめん！もう無理！」

「おっ…2cmか…さてさてこれからはどうなるやら」

俺はドキドキが止まらなかつた。穂奈美からの非難の視線は無視する事にした。

「何で途中で止めたのよ？」

「付き合つてないのにダメだろ…」

「もう…別にいいのに…」

「何？して欲しかった？」

「そりゃして欲しかったわよ！…はっ、次行くわよ！」

「あぁ…」

まさかそんな言葉が出てくるとは思ってた。これ真琴さんより酷くなりそうじゃね？

つか、ドキドキするから変に開き直るのはやめてよ…

それからは俺は穂奈美の言われた通りに動いてた。決して自分からではない。それは主張させていたどころ。

何故ならー

「え？1人で動けって？」

「ああ…もう1人で動いても大丈夫だろ？」

「やだよ！どうするの？先輩とかにナンパされて体育館倉庫に閉じ込められて色々されちゃったら？！」

「いや、この平和ボケしてる学校には無いだろ…色々ってなんだよ、色々って」

「分からないよ？最近の世の中は物騒だから。色々は…お、お嫁に行けなくなる体にされちゃう事！だから、一緒に動く！ほら、ボデイーガード！」

「え？ちよつと…ええ〜？！」

という訳だ。ゴリ押しされた感じだな。穂奈美の思考回路を見てみたいぜ…

「お腹空いた…今何時？」

「12時過ぎたかな…何か食べるか？シフトは…1時からだな。何か腹に何か入れてから行こうぜ」

「そうだね…あ、フランクフルトあるよ」

「了解。買って来てやんよ」

そう言って俺は直売店に行く。

「フランクフルト2つ」

「あいよ。120円な」

「ほいほい、ピッタリだ。…頑張れ龍」

「ああ、お前もな…」

何と店員は龍でした。知り合いに会えたからちよっぴり嬉しい。

その後は腹にフランクフルトを入れてお化け屋敷のシフトに回る事になった。

俺と穂奈美は仕掛け組でたまたま同じ場所になってしまった。

…何されるか分かったもんじゃない。

「芳樹ー…2人きりだね…」

「違うし、狭いからもう少し向こうに行ってくれと幸せ」

「無理だよー狭いんだから…」

……もうダメだ。こいつ単純にバカなんだろう…

バカ可愛いつてやつか？だから俺は…

いや、意識するから考えない。

とりあえず、明日かな…と無意識にお化け屋敷の仕掛けの操作を続けた。

後ろからは終始柔らかい香りがしていた。

秋 3 (後書き)

幸平の方とSeasonが何時の間にか1000PV超えててビックリ！

いや、ホントこんなヘンテコになってる小説を見ていただいてあげがとうございますm()m

更新スピードは遅いですが、
これからも歌音を宜しくお願いします。

秋 4 (前書き)

テストが終わり次第少しずつ投下していきます。

文章が相変わらずおかしかったり、急展開だったりしますが…宜しくお願ひします。

秋 4

文化祭2日目。俺にとっては…運命の日。
どうにか成功する様に…と考えている。

俺達は準備の為、公開リハーサルの形で学校のスタジオで最終確認。
俺たちのバンドは後夜祭でやる様だ。

とまあ、暇になったから適当に俺は屋上に出て見る事にした。

「俺は赤尾さんの事が好きです！付き合ってください！」

わーお、告白シーン…誰だっけ、赤尾さんって…何か身近な人だった気が…

「ごめんなさい、私もう告白待ちの人がいるの」

あ、穂奈美だ。…ああ！あいつ確か赤尾穂奈美だっけ？

うん…忘れてたわ…

「そうですか…ごめんなさい」

トボトボとこつちに歩いてくるから慌てて隠れる。

正直言つて嫌だった。今まで穂奈美は俺の側に居て色々世話をしてくれたけど、いきなりいなくなるのでは？と思ったからだ。

！すまない、待たせたな…

微妙に心残りがあるが俺はバンドの待合室に戻ってきた。翔一は電話してた。

「ーああ、…ん？ 緋奈、今夜は一緒にー」

今夜は一緒につてなんだ！

翔一と緋奈さんの日常を見てみたいぞ。

…だめだ、知った途端に何か起きそう。

「おう、じゃあな。また。…ふう。お、帰って来たか芳樹」

「とりあえず、お前は今日の夜に何かあるのか教えてくれ」

「……18禁だ……」

某然とした。近くに大人がいるとは…いいや、不健全！

「これで文化祭を終わります。後夜祭が始まるので校庭に集まってください」

バンドの前に全校前の自己主張がある。告白したり先生の悪口を言ったり…している。

「僕は先生2人で繁華街に消えて行くのをみました。手を繋いで仲良くしてました」

裏方だが先生の顔が赤らむのが見えた。

おっと、真琴さんがやってきた。

「私、磯部真琴は南部幸平が大好きです！もう愛して止みません！もう全てを捧げたいです！」

はあ？！ちよつと何飛んだ発言をしているんだ？！

お、幸平だ…

「今日から子作りだね 学生結婚しちゃおうか！」

…憐れ…搾り取られない様に頑張れ…

自己主張が終わり、軽音楽が慌ただしく動き始めた。

セットを確認の為走り、チューニングの確認の為ギター、ベースを弄る人。俺はやる事が終わってるので演奏する曲を音楽プレイヤーで聞いていた。

どうにかセットを終えて演奏が始まった。

今は同じ一年生のガールズバンドだ。ポップ調の曲を演奏している。

「これは盛り上がるな…」

「そうだな、次は俺たちだけけど大丈夫か？」

「ああ。翔一テンパってリズム崩すなよ？」

「信汰もタム回し遅れるなよ？」

「ほらほら、演奏終わりそうだから行くよ」

「へい、じゃあ本気で楽しむぞ！」

「…おっ！」「…」

俺達はステージに出た。前には沢山の人が居た中で俺は穂奈美を探

していた。

「居た」

穂奈美、幸平、真琴さん、緋奈さんはこっちに手を振っている。翔一を見ると振りかえしてたから俺も真似した。少しは緊張解けたかな…

信汰のドラムカウントで曲が始まった。全体的にテンションの上がる縦ノリビート系を選んだ。熱狂したステージで俺達は思いつきり楽しんだ。

「「ありがとうございます！最後にギターの方樹君から何かあります！」

いや、何かって…マジックでもするみたいになってるから…

「ふう…個人的な事ですみません。…穂奈美！この前の返事がしたいから終わったら屋上に来てくれ！以上！」

と言った途端に何かを察した人が黄色い声を上げた。

…後は言うだけだ。

「よう、よく言えたな」

「ああ…もう二度とできなさそうだ…」

「まあまあ…頑張れよ。お前なら大丈夫だ。あ、俺片付けるから行ってこいよ。穂奈美待ってるぞ？」

ポンと肩を叩かれ片付けをし始めた。

ありがとう、翔一。行ってくる。

屋上に来ると穂奈美がフェンス越しに校庭を眺めていた。夕焼けと一緒になっていたから叙情的だった。

「芳樹：さっきとてもカッコよかったよ。周りの女の子たち凄かったもん」

「そうか…ありがとう…」

と言って会話が途切れる。俺はドキドキしてて頭が回らない。穂奈美も同じなんだろうか。口が開いたり閉じたりしている。

「えっとさ…」

ようやく俺は口にする事ができた。

「うん…」

「……俺も穂奈美が好きだ。遅れてごめんな…」

穂奈美は俺の腕の中に入ってきた。

「なんだよ…忘れられてたのかと思ってたじゃん…！」

「ごめんな…」

そう言っって頭を撫でてやる。

「私も芳樹が好きだよ…宜しくね…！」

それから俺らは抱きしめあった。

キス？そんなもん、恥ずかしくてできるかってんだ！
今はこの温もりだけで十分だ。

「ほら、まだ後夜祭残ってるから行く？」

「うん、そうだな」

左手には柔らかい感触。離さない様にギュツと力を入れた。

秋
5

「冬休み入ったら俺達、先輩達と一緒にライブやるから。対バンってやつかな？」

何と、文化祭のライブが好評だったらしく部長バンド主催のライブに参加させてくれる事になった。

「で、日付はいつなんだ？芳樹？」

「ん？ああ、12月24日だよ」

「おう、後1ヶ月。いや、2ヶ月ぐらいか…？」

現在11月前半。これからスタジオにかかりつけだな…

「つか、何やるつか？」

「うーん…それぞれ好きな曲をカバーして…オリジナルやるか？」

「オリジナル？作詞作曲してる時間があるのか？」

「んあ、俺作詞はした事あるよ？」

「ホントか？作曲か…そのまま龍頼んでも良いか？」

「ああ、作曲ソフトネットから落とすわ。打ち込みになるけどいい？」

「ん、構わない」

「大丈夫」

「俺も同じだ。じゃあ、コピーする曲だけどー」

「へえ、そうなんだ？」

「ああ、だからクリスマスはちょっと忙しいかな……」

今、俺たちは夕飯を食べている。ん、穂奈美の腕は落ちないなあ……

「……」

「えと……穂奈美？」

「……私より……ライブなの……？」

「いや、そう言うわけじゃないけど……」

「じゃあ、終わったらさ……」

「終わったら？」

「もっつ！……私の気が済むまでデートしてね？」

ニコツと途轍もない笑顔を見せてきた。可愛いなあ……いや、落ち着け。

「……もし、気が済まなかったら？」

「アナタヲハナサナイ……」

うん……怖いからフォークを握り締めないで。

俺、やんでれって奴はタイプじゃないし……いや、そう言う問題じゃないか。

「と言うのは冗談で……」

「良かった……」

「……何が良かったのかしらあ？」

ひい！穂奈美の後ろから黒いオーラが溢れ出てきて居るよ？！

「コホン……とりあえずクリスマスはライブ後にデートだから……忘れ

ないでね？」

「あ、ああ。大丈夫、忘れない」

…寿命縮まった…

夜と言っても、まだ8時。まだ穂奈美は俺の家に居る。
…何故か俺の膝の上に乗って。

「えと、穂奈美さん？」

「うん？何？」

「何で俺の上に乗ってるの？」

「いや、特に…あ、この体制のままプレ」

「それ以上はダメ」

何かダメな気がする。特に理由は無い。

「え?!私を愛してくれないの?!」

「いや、好きだけどさあ…」

「じゃあ、あなたを感じさせて…」

あ、今良い事思いついた。

じゃあ、やってみつかないかな…

「しょうがない、感じさせてやるよ…んっ…」

「ひゃっ!」

…えと…大当たり?

適当に感じそうな場所を探したんだが…

「へえ、首か…ならもつと…」

「ひゃっ！や、やめて！」

首から耳へと移す。

「ふぁ！…ふう〜…」

へナへナと穂奈美の力が抜けて行く。

……何かとんでもない事してるよな。

秋 5 (後書き)

テスト終わりました！

いつも通りに学校。

「ーと言っても、中間テストは少し前に終わってるからどちらかという俺はテンションが高い。
低いと言ったら…」

「おつす、龍、信汰。なあ、龍はどうした？」

「ああ、何か中間が全部終わってるらしいよ」

「……何？二次関数とか分かるかよ…何で物理はあんなに意味不明な記号がたくさん出てくるんだよ…」

「ああ、成る程な。でも、できないのは理解しようとしてないから…」

「頭の良いリア充野郎は爆発しろー！」

泣きながら龍はかけて行く。苦笑いしながら信汰もまた今度ねと追いかけて行く。

「芳樹と翔一って面白いメンバーに囲まれてるんだね…あ、そうだ。今日は私達スタジオに行っちゃうから帰るの遅いからね？」

「ん、了解。じゃあ、俺が飯をー」

「芳樹達の会話が新婚さんにしか聞こえないんだけど…」

「そうだね、幸平くん」

ビックリした。後ろを向いたら幸平と真琴さんが居たのだ。

「おう、ビックリするからいきなり俺達のは後ろに立つなよ」

「あはは、ゴメンね」

そういいながらクラスに入る。もうあの変なテンションのお祭り騒ぎはなくなった。

収集には時間がかかったが…

「うーす」

「おはよー!」

「おう」

何ともない会話。俺はこう言つのが大好きだ。何とというか…安心するみたいなの？

「ねえねえ、芳樹？昨晚の所為で腰痛いんだけど…」

トンデモ発言しやがりました、穂奈美さん。つか、俺は何もしてないぞ?!

「昨日の夜、穂奈美が勝手に飛びかかってきて足を引っ掛けて転んで腰打っただけだろ…お願いだからお前らそんな穢れた目で俺を見ないでくれ…」

さっきの発言でクラスの男子の8割が殺気を振りまきながら俺の事を見てきた。

「芳樹…」

「何だ、幸平？」

「僕らでも流石に鬼畜系は…」

「お前、何やった？」

頭が痛くなった。

昼休み、クラスのいつものメンバーと昼食を取りながら談笑していた所：

「坂上君！」

「んあ、芳樹呼ばれてんぞ？」

首を巡らせてみると目を尖らせたキツイ感じの美人が居た。

「何だ？俺あんたに見覚えないぞ？」

「別に貴方はないと思うわ。言いたい事は一言ー私と付き合いなさい」

「ーはあ？」

その時、クラスが固まり穂奈美から殺気を感じた。

俺、何もした事ない！

冬 1 (前書き)

冬編に突入！

冬 1

この間の女は中内麗奈とか言うヤツらしい。
らしいというのはあの後、穂奈美と中内が喧嘩をしだし乱闘状態だ
ったからだ。

今は冬。冬でもまだ11月後半だ。ああ寒い寒い。

「芳樹、マフラーとか無いの？」

「ああ。買おうと思うとお金が勿体無くてな…」

「ギターにお金かけすぎてるからよ…ほら、手を出して？」

「ん…ああ、そう言う事ね」

「少しは暖かいでしょ？」

今、俺は穂奈美に手を握られて居る。暖かい…

「今度、マフラー買ってあげるわよ？」

「あ、ありがとう。楽しみにしてるから」

俺にグツと来る笑顔で見てきたから思わずたじろいてしまった…こ
いつ、俺には犯罪レベルだな…

学校に到着して、クラスに入り席に座る。ここまでは今まで何の代
わりは無い。ただ…

「おはようございます、坂上くん。またそんな女と登校してるの？」

「またとか言わないでよ！芳樹は私の恋人よ?!」
「そんな事は知らないわ!」

最近の日常は修羅場…と言っても俺は穂奈美大好き野郎だし靡くつもりは毛頭無いのだが…何故か諦めてくれない。

「なあ、俺は穂奈美以外には全く興味無いんだから諦めて他の男でも探して幸せになつてくれないか?」

「何でなの?私は貴方の運命の人だと確信してるのよ?」

「はあ…」

取り付く島も無いとはこの事か…俺は穂奈美と目を合わせて溜息を吐いた。

中内(敬意無し)はようやく帰って行った。

「はあ…何なのかしらあの子は…」

「さあ?この間のライブで惚れたんじゃないの?」

「あんたねえ…呑気な事言つてられないよ?」

「ライブで惚れたと言つても内面は知るはず無いし、一時的な妄想か何かだろ…呑気な事言つてられないのは穂奈美じゃ無いのか?」

「まあ…そうだけどさ」

「気にすんな。俺は元々穂奈美だけだ。…愛してるよ…」

最後は耳元でボソリ。耳が弱いのが分かってたから勿論ワザと。

「はう…じゃあ、今日は期待してベッドに入ってるわよ?」

「それは無いから安心して」

「むう…ケチ」

朝のSHR。担任が入ってきて開口一番がー

「お前らー、3週間後テストは忘れてないだろうな？何、忘れてた？まだ間に合う。まあつまりだ、そろそろ勉強しろという事だな。以上だ。頑張れよ？」

周りからやだとか忘れてたとか色んな声が聞こえてくる。俺も…少し忘れてた。決して負け惜しみでは無いよ？

「芳樹…テスト…」

「何だ？しっかりと見えよ、穂奈美さん？」

「もう…ニヤニヤしながら言われても気持ち悪いだけよ！」

「じゃあー、教えてあげない。1人で頑張ってるねー」

「ああもう…お願いします、芳樹勉強…教えて？」

調子に乗って弄ってやったのが間違이었다らしく、むっとした目で見上げられた。

…お願いだからそんな目で見ないで…夜とか抑えきれないと思うし…

「よし、じゃあ今日から…」

「坂上くん！勉強教えてあげるから一緒にやるう？！」

またか…何回言えば分かるかな…

「勉強教えるって芳樹、頭良いわよ？しかも、私が勉強教えてもらうからダメ！」

「あら…残念ね。私が教えるからあなたは用なしね。因みに私は2番よ？」

「何だ、芳樹の方が勝ってるじゃん。芳樹の方は10位よ?」

「穂奈美?何でそんな事を知ってるんだ?!」

「えと…愛の力?」

「このっ…可愛い事言うなあ…」

撫でてあげる。この内山つて人は苦手だし…人の話を聞かないし…

「こら!坂上くんにくっつかないで!」

「私、むしろ触られてるんだけど…」

「ああ言えばこう言う!」

「事実でしょ?!」

ああ…何か平和だなあ…前のを除くと…

「ほら、穂奈美…帰るぞ?」

「あ、うん。バイバイ、内山さん?」

「あ、ちよっと!待ちなさい?!」

とりあえず、俺の家に逃走する事にした。

…家まで追ってこないよね?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6386w/>

Season

2011年10月21日05時03分発行